

『オルドス民話収集』(6)
— 錢世英著、1999年、フフホト—

児玉香菜子 訳

1. テキストについて

本テキストはペンネーム錢世英、モンゴル語名ジャガスが収集整理した『オルドス民話収集』(内蒙古人民出版社、1999年)¹に収められている民話86話のうち、「人物の民話」34話から7話²を訳出したものである³。訳出した民話それぞれの末尾に原題と原書の頁番号および口述者の氏名、採集整理年を記した。これらの主要な採録地は著者の出身地であるオルドス地域ウーシン(烏審)旗⁴であろう(児玉訳 2016:121)。

2. 民話7話の内容と特徴

第1話「サインフーと柴刈男」は、苦労人の女主人公が大変な苦労をして育て上げた息子に嫁の影響を受けて捨てられ、息子とその嫁がその報いを受ける話である。作中に女主人公を助ける不思議な力を持つ黄色い犬が出てくる。すでに訳出した「婿を取る」(児玉 2020)にもヒロインを助ける不思議な力をもつ黄色い犬が登場しており、改めて重要な役割を感じさせるものである。

第2話「3粒のゴマの種で苦労を請け戻す」は、けちな金持ちの家で長年奉公していた苦労人が十分な賃金を得られなかったため、「わらしべ長者」のような形で、金持ちからその報酬を奪い返していく話である。累積譚「貸すことと返してもらうこと：損をしていく(よくなる)交換」に入ろう(ウター 2016:963)。

第3話「余三と謝四」は第2話と同じく、けちな金持ちから十分な賃金がもらえなかった奉公人の話である。金持ち余三の家に奉公していた主人公謝四は十分な報酬どころか、10年間の奉公で得たのはわずかごま油5キロであった。謝四はそのごま油を寺院に布施し、裕福な未来を約束される。一方で、余三はたくさんの銀をお布施するが、来世では醜いロバになると告げられてしまう。その

¹ 原著名は『鄂尔多斯民间采风』。编者については児玉訳(2016:121)を参照のこと。

² 話の内容にあわせて訳者が掲載順を変更している。本来の掲載順は「余三と謝四」、「ナーダムの由来」、「サインフーと柴刈男」、「ハーンによる息子の嫁選び」、「3粒のゴマの種で苦労を請け戻す」、「娘婿3人による長寿祝い」、「わたしにかまうな、新聞に掲載されることが重要である」である。

³ 同著書にはほかに「動植物の民話」28話と「神話物語」24話がある。「動植物の民話」はすべて、「人物の民話」は17話、「神話物語」は2話をすでに訳出している(児玉訳 2016; 2018; 2019; 2020; 2021)。

⁴ 旗は内モンゴル自治区での行政区の名で、中国の行政単位の県(縣)に相当する。

⁵ ウーシン旗については児玉訳(2016:121-123)を参照のこと。

後、それを避けるために、今までの悪行を反省するよう娘に諭される。

第1, 2, 3話は大きく因果応報譚に通じる話である。同時に、第2話と第3話は搾取階級を批判する社会主義特有の視点を感じられる。

第4話はハーンの息子の嫁候補のとんち話である。話型としては「現実的説話—女が王子と結婚する」の「賢い百姓娘」に該当しよう（ウター2016: 417）。第3話もそうであるが、登場する女性は賢く、聡明である。

第5話は教養あるとされる人とそれをむやみに奉る人を皮肉った話である。

第6話は人民公社時代の英雄になりたがる若者を、ひいては何ごとくも安易に英雄にする風潮を揶揄した話である。すでに訳出した「ウシとサルが果樹を植える」（児玉訳2019）における官僚批判に通じるものがある。

第7話はナーダムとモンゴル語で呼ばれる祭りの由来と祝詞を紹介したものである。

語り手は第1話と第4話が編者のおば、第2話が編者の父で、皆モンゴル人である。ただし、舞台がモンゴルかという点、第4話を除いて、第1話はオンドルが出てくるなど、いち早く定住していることが読み取れる。第2話ではラバが登場し、舞台は中国であろう。他方で、第3話の語り手は何玉柱、第5話は楊三、第6話は王勝利で、どれも原書で口述採録されているのはこれら1話のみである。第3話は農作業とともに、家畜の放牧なども出てくるが、登場人物名や民話の内容から中国由来の話で、話者は中国人と推察される。第5話も同様である。第3話の編者、銭世軍は銭世英と一字違いであることから、編者の家族親類の可能性が高く、モンゴル人であろう。

3. 人物の民話

(1) サインフー⁶と柴刈男

むかしむかし、チャガーンデレス草原⁷に善良で苦しい運命にある老女が住んでいた。その名をバラ⁸と言った。

バラは若い時から後家を通した。バラの夫は急病で亡くなり、残ったのは小さなモンゴル・ゲルと幼い息子だけだった。バラは涙をたたえて亡くなった夫を埋葬し、自分一人で息子を育てる重荷を背負ってきた。バラは3歳にもならない息子をおんぶしてバヤン⁹の家に身を寄せて、召使になった。バラはバヤンのために水を運び、洗濯し、キビをつき¹⁰、ミルクを搾り、針仕事をした。バラは朝早

⁶ モンゴル人名で、よい息子の意。日本語名では良男といったところであろう。

⁷ すでに訳出した「3人の息子が技能を身につける」と同じ地名である。バヤンノール（巴彥淖爾）市ウラト（烏拉特）後旗に同名の村がある（児玉2021）。

⁸ モンゴル語で、はちみつの意。

⁹ モンゴル語で、金持ちの意。

¹⁰ 炒ったキビを臼に入れてついて脱穀する作業のこと。

くに起きて暗くなるまで手足を休ませることなく働いた。念頭にあったのはただ一つ、少しでも多くお金を稼いで貯めて、息子に嫁を迎えることだった。

バラが 30 キロのキビをつくると、バヤンは手間賃として椀半分のキビと椀 2 杯分のキビのふすま¹¹を与えた。バラはキビを息子に与え、自分はふすまを食べた。幼い息子のサインフーは無邪気に尋ねた。

「母さん、どうしていつもふすまを食べて、キビを食べないの？」

「母さんはね、このふすまを食べるのが大好きなんだよ。」¹²

とバラは答えた。

バラはキビやふすまでさえ、これまで心ゆくまで食べたことは無かった。仕事をしておなかが空くと、ほしいの袋を開けて、舌で 2、3 口なめて一食分とした。

バラは日中丸一日肉体労働をし、夜には油ランプの下で針仕事をした。バラは頭がよく手先が器用で、裁縫による長衣は体にあうだけでなく、材料を省き、バヤン家の年寄りから子どもまで十数人の衣服はみなバラがひと針ひと針縫いあげたものであった。バヤンの妻は機嫌がよい時には、自分のあまり好みではない生地を 1、2 枚選んで褒美としてバラに与えた。バラはそれらをみなしまつて貯めた。

バラは朝早くから夜遅くまで働き、食を切りつめて儉約な生活をし、苦勞をして息子を育て、息子が 18 歳になったときに、バラは少しばかりの財産を貯めた。息子が成長し大人になったのを見て、バラのみじめな心に幸せな気持ちが沸き上がってきた。バラは毎日息子が嫁をもらうその日を待ち望み、夢見るのはいつも嫁の容貌を想像することだった。バラはさらに朝早く起きて夜遅くまで働き、息子に少しでも多く稼いであげたかった。しかし、夜なべが多すぎて、バラの視力は日に日に弱くなっていった。ある晩、バラはほの暗い油ランプの下で針仕事をしていると、突然何も見えなくなった。バラは息子に叫んだ。

「サインフー、母さんに早く灯を灯しておくれ。」

バラは灯が消えたのだと思った。

「灯はついているよ。何をつけるんだい？」

と息子は言った。

バラはそれを聞いて、心が重くなった。バラは手で目をよくこすってみたが、やはり何も見えなかった。バラは両目を失明した。

¹¹ モンゴル語でアーク (ayag) と呼ばれる。本来はヒツジとヤギの飼料で、キビの実がないときに柔らかくしてヨーグルトと一緒に食していた。

¹² 原文では会話により改行の有無にばらつきがある。本稿では会話文の場合はすべて改行に統一した。

「まだこの目で花嫁がどのような容姿か見ることなしに失明してしまった。いつか嫁を迎える時に、わたしは嫁の姿すら見ることはできない。ああでもない、こうでもない待ち望んでいたのに。何も見えなくなってしまった。ああ！」

バラはいつも悲しくこのことを考えていた。

バラは悲しみながら、かつ心待ちにしながら、さらに2年の月日が過ぎ、サインフーはついに嫁を迎えた。苦しい運命の中にいたバラはうれしくて感激の涙を流した。

20 数年の間、バラは息子のためにさんざん苦しみ耐え、息子のために食事を切りつめ、節約してきた。今息子はようやく嫁を娶り所帯をもったので、バラはようやく肩の荷がおりた。バラは喜びに目を輝かせ、丸一日うれしくて口元がゆるみばなしだった。心の中でひそかに孫を抱くその日を心待ちにしていた。

誰が予想したであろうか、人の心は推し量りがたい。バラがずっと待ち望んだ嫁はこの両目を失明しためくらのばばあが心の底から嫌いで、嫁に来てからというものいい顔をしたことがなかった。ただ、バラにはそれが見えなかった。嫁は、姑が毎日オンドル¹³の上に座って、働かずにむだ飯を食うのを不満に思い、ひそかに姑に特別な「世話」をした。おかゆを煮て、濃い部分を夫と自分に残し、薄い部分を姑にさじであげた。肉を煮たら、肉を夫と自分に残し、骨を姑のお椀に山もりにした。これらすべてをバラは見えず、バラは自身の善良な心で嫁もきっと善良な女性に違いないと推し量っていた。そのため、嫁がバラに何をもってきても、バラは心の中でうれしく思っていた。嫁は面と向かってこのように姑の「世話」をしつつ、さらに陰で夫に向かっていつも姑の悪口を話して聞かせていた。

「おまえさんの母さんは何もしないで、わたしたちに無駄に面倒を見させているのではないかい。」

「めくらのばばあはいつまでも死なないし、わたしの心はいつになっても不愉快なままだ。」

サインフーは嫁をめぐって以後、何でも妻の言うことを聞き、少しずつ良心をなくしてしまった。ある日、サインフーは老いた母に言った。

「母さん、20 数年母さんは苦勞して苦しい目にあってきて、一日だって楽をしたことがないよね。今日、息子の僕が母さんを背負って外を少し歩こう。」

バラはそれを聞くと喜んで言った。

「お前さんの親孝行という気持ちだけで、母さんは十分満足だよ。わたしは本当に幸せ者だ！」

サインフーは母を背負って出発した。後ろに年取った黄色い犬が付いてきていた。丸一日歩いて、山の崖につくと、サインフーは母を地面の上に置き、よく言い含めた。

「母さん、ここに座って僕を待っていて。僕は近くで水とほしいを手に入れてきて、飢えと渴きをい

¹³ 中国語で「炕」。暖房設備。床下に煉瓦などを仕切った煙道を設け、焚口から煙を送り込んで部屋を暖める。

やすね。飲み食いが終わったら、また母さんを背負って道を急ぐよ。母さんはいつも十数人の親戚と何年も会っていないと言っていなかったかい？今回、母さんを背負って一軒一軒寄って行こう。」

息子の話を聞くと、バラは喜んでうなずいた。息子が行ってしまっても、バラは根気強く座って待っていた。長いこと待っていて、突然バラの懐の中に小さな布袋が落ちてきた。バラは手で触ると、それはほしいの入った袋で、袋を開けて触ると中には2枚の丸いビン¹⁴と数つかみのキビが入っていた。バラは、これは絶対に息子がわたしに探してきてくれたものだと考えた。バラは愛おしく息子の名前を呼んだが、返事は無かった。バラは、息子が水を見つけられなかったので、水を探しに行ったのだと思った。バラはビンをとり出してちょうど食べようとしたとき、突然聞きなれない声が聞こえた。

「おばあさん、なぜわたしのほしいを盗み食いするのですか!？」

バラはぎょっとして、あわただしく立ち上がって言った。

「このほしいはお前さんのを盗んだものかい？」

と言いながら、足を踏み出し息子を探してどういうことか尋ねようとした。

「おばあさん、動かないで。目の前は一步足らずで奈落の底です。」

知らない人はあわてた様子で言った。

バラはまた驚いて、尋ねた。

「つまり、このほしいはわたしの息子がわたしにもってきてくれたものではないのかい？それならこの袋はどうやってわたしの懐に落ちてきたのかい？おまえさんは誰だい？」

その人は言った。

「わたしはラマ寺の柴刈男で、毎日この山の中に来て柴を刈って、それを背負って寺院に送り届け、寺院のラマがわたしに一日分のほしいをくれます。このほしい袋はわたしが刈り終わった柴の上に置いておいたもので、あなたさまの黄色い老犬がわたしの不注意に乗じて、盗んで行ってしまったものです。」

バラはこのときすべてを理解した。息子はわたしを見捨て、イヌはわたしが飢えているのを恐れて、他人のほしいを盗んでわたしに持ってきたのだ。こういうことだったのだ。

「イヌにすらおよばない奴だ！」

とバラはひどくののしり、悲しくて泣きだした。

柴刈男はバラが泣いて悲しんでいるのを見て、その理由を聞くと、怒ると同時に同情した。柴刈男は良心がない息子がこのような極悪非道なことをしたことに怒り、またこの哀れな盲目の老人が思いがけずこのような不幸にあってしまったことに同情した。すぐに柴刈男はその老人の前にひざまずい

¹⁴ 中国語で「餅」と表記し、小麦粉をこねて、平たい円盤状にして焼くか蒸したのもの。

て言った。

「柴刈男であるわたしは幼い時に両親を失いました。もしわたしのよくなこの貧しい男をいとわなければ、わたしの願いを聞いてください。これから、あなたさまはわたしの実の母で、わたしはあなたの実の息子です。」

バラは感激して、しばし声が出なくなるまで泣いた。

柴刈男はおばあさんを背負って山のふもとにある自分のおんぼろの小さなかやぶきの小屋に行き、まるで実の母親のように孝行した。毎日柴を背負って稼いだほしいを半分節約しておばあさんに食べさせた。

数日が立ち、ラマ僧は柴刈男が日一日とやつれていくのを見て、気づかうようにどうしたことか尋ねた。柴刈男は山の崖で母と知り合ったことをありのままラマ僧に告げると、ラマ僧は大変感動した。その場で今後は毎日柴刈男に2人分のほしいをあげることにした。柴刈男はこのよい知らせを老いた母に告げた。バラは感無量で、涙を流しながら言った。

「世の中にはやはり善人が多いのだなあ！」

バラと柴刈男は助け合って生活した。貧しくも穏やかな日々は日一日と過ぎていった。

ある日、柴刈男が柴を運び終わって帰ってくると、年老いた母がオンドルの上に座って人知れず泣いているのが目に入った。聞くと、黄色い老犬がいなくなったということだった。

「ことわざでは『子は母が醜いのを厭わない、イヌは家が貧しいのを厭わない』と言う。しかし、わたしのところではすべて当てはまらないのだ。息子はわたしが醜いのを厭い、イヌもわたしが貧しいのを厭い、皆わたしがいらぬのだ。わたしはほんとうに役立たずのばあさんだ！」

バラは悲しげにつぶやいた。

柴刈男は慰めて言った。

「そんなはずないですよ。猟師の落とし穴に落ちて出られなくなっているのかもしれない。わたしが探してきましょう。」

柴刈男はイヌを探しに出かけ、深い山の中の洞くつにやってきて、ついに黄色い老犬を見つけた。ふと見ると黄色い老犬は一山の銀白色の鉄の卵の形をしたものの上に横になり、どんなに呼んでも動かなかつた。柴刈男は近づいていき、黄色いイヌを抱きかかえても、洞くつを出て手をゆるめたとなん、黄色いイヌはまた洞くつの中に戻りその一山の白い卵型の上に横になった。柴刈男はこの白い卵型のものが何か分からず、イヌがその上に横になって離れたがらないのを見て、どうしようもなく、腰を曲げて白い卵型のものを2つ拾いあげて懐にしまうと、黄色い老犬はようやく柴刈男について家に帰った。

家に帰ってくると、柴刈男はイヌを探した経緯を老いた母に話し、さらに持って帰ってきた白い卵型のもの2つを母に手渡した。

バラは2つの白い卵型のものを受け取り、一つ一つ触り、手で重さをはかりはかり、言った。

「息子よ。これはどうやら馬蹄銀のようだよ。夜の暗いときに、それら卵型をすべて背負って持って帰ってきて、明日ラマ僧に持っていき、やはり馬蹄銀なのかどうか、見てもらいなさい。」

バラは少し間をおいてからまた言った。

「もしそうであるなら、わたしたちはそれをすべて寺院に献上しよう。わたしたちが困っているときの仏様からのわたしたちへの施しに感謝しよう。」

翌日、柴刈男は銀白色の卵型のものをすべて袋に詰め、背中に背負ってラマ寺院に行った。ラマ僧は見たのち、断言した。

「これらはみな馬蹄銀です。」

柴刈男はこれらすべてが馬蹄銀であると聞くなり、年老いた母の言いつけどおりにラマにすべて受け取ってくれるように求めた。柴刈男は馬蹄銀を手にした経緯をラマ僧に詳しく話して聞かせた。ラマ僧は聞き終わると、慈悲深い様子で柴刈男に告げた。

「おまえさん母子が苦難を共にし、愛情がこまやかなので、天の神様が強く心を打たれて、神仙がおまえさんたちに幸運を恵んでくださったのだよ。」

ラマ僧は馬蹄銀をほんの少し手元に残しただけで、その残りすべては柴刈男に返した。ラマ僧は手元に残した馬蹄銀を使って自ら大工を雇い、バラと柴刈男のために新しい家を建てた。母子2人が新しい家に引っ越して以来、生活は次第に良くなっていった。

1年が過ぎ、干ばつになり、収穫が一粒もなく、家畜が大量に死に、凶作で飢えた人民がいたるところで浮浪者となって物乞いするようになった。しかも穀物を貯蔵している大地主たちはこの機会に乗じて高値で穀物を販売する。バラはこれを聞いて、とても気の毒に思った。自分が苦境に陥ったとき幸いにも善人の助けに出会ったことに思い当たり、心は久しく落ち着くことができなかった。バラは柴刈男に言った。

「子よ、わたしたちにはまだ少なくない馬蹄銀がありますよね。すべてを供出して被災者を助けましょう。もし全員に濃いおかゆが行きわたらないのであれば、せめて毎日被災民に一杯のおかゆを飲んでもらうだけでもいいでしょう！」

柴刈男は老いた母の話に従って、馬蹄銀を供出して大変な高値になっている穀物を買ひ、道端に一つの大きな鍋を据え、毎日鍋いっぱいのおかゆを煮て大勢の飢えた人びとに飲ませた。

しばらくして、飢えた民の中の一組の若い夫婦は大変哀れで、列に並んで粥を待つたびに、彼らの番になると、粥は無くなってしまうということに柴刈男は気が付いた。たとえ柴刈男が隊列のどの先頭から分け始めても、いつもそのようであった。柴刈男は彼らにとっても同情し、彼らに翌日に少し早めに来るように言って、彼らも早くやってきたが、他の人たちは彼らよりもさらに来るのが早く、彼ら2人はやはり救援飯を食べることができなかった。

その日、柴刈男は家に帰るとこの不思議な出来事を母に告げた。バラは聞くと、やはり不思議に思った。「わたしのあの2人の親不孝者ではないか。もし彼らならば、彼らが救援飯を食べられなかったのはきつとお天道様からの彼らが犯したすべての罪業に対する懲罰か報いに違いない。」

柴刈男は言った。

「もし本当にわたしの兄と兄嫁であるならば、わたしたちは彼らに馬蹄銀をいくらかあげましょう。」

バラは言った。

「もし本当に彼ら2人ならば、彼らに馬蹄銀をあげても絶対に手に入れることはできないだろう。信じないなら、試してみなさい。」

次の日、柴刈男は馬蹄銀2つをキビのふすまが入っている袋の中にうずめてその2人の若い夫婦に手渡した。彼らはそれを開けて中がキビのふすまのを見て、思いがけず、見向きもしないで、すぐに袋をかまどの片隅に捨てて行ってしまった。

柴刈男は追いかけていき、大声で言った。

「サインフー兄さん。」

彼ら2人は同時に足を止め、振り返って柴刈男を見た。柴刈男は思った。きっと兄さんにちがいない、そこで懐から馬蹄銀2つを取り出し、差し出した。その女性はその2つの大きな馬蹄銀を見てすぐに目を丸く大きく見開き、そして、眉間にしわを寄せた。

サインフーは少し腑に落ちず、見知らぬ人がなぜ兄と呼んだ上に、馬蹄銀をくれるのか。そこで尋ねた。

「兄弟呼ばわりするのはどういうわけなのだ？おまえさんはどうしてわたしの名前を知っているのかい？」

柴刈男は山の崖で母と知り合い、そして山の洞窟で馬蹄銀を拾ったことをありのままにサインフーに告げた。

サインフーは聞き終わるとしばしあっけにとられていて、ようやく口を開くと、

「道理でおまえさんはそんなにお金持なのですね。本来、わたしの母のお金を使っているのですね。早くわたしを連れて母に会わせてくれ。」

人のいい柴刈男は彼らを家に引き入れて、実の母子を再会させた。

サインフーは家に入るとすぐに、非常に悲しみ嘆く様子で言った。

「母さん、わたしはやっとあなたさまを見つけることができました。わたしはあなたさまの実の息子のサインフーです。あの日、わたしは山の坂であなたさまを待たせ、わたしは水とほしいを探しに行きました。しかし、わたしがほしいと水を見つけて戻って来たときには、母さんはすでにこのウソつきに騙されて連れ去られていました・・・」

「黙れ！」

バラは怒りで髪の毛を逆立たせて、言った。

「おまえがわたしの息子を侮辱するのは許さないよ！ そうだ、お前はわたしの実の息子だ。だが、お前の良心はもうなくなってしまった。柴刈男はわたしの実の息子でないけれども、柴刈男こそわたしの本当のいい息子（サインフー）だ。」

サインフーとその妻はバラに家から追い出された。しかし、彼らはバラと柴刈男が手にするすべての馬蹄銀を手に入れることができなかつたので、絶対にこのまま引き下がる気は無かつた。彼ら2人は悪だくみを計画し、日中は山の中に隠れ、晩に夜がふけて人が寝静まったときに馬蹄銀を盗んでこようと準備をしていたが、結局崖に落ちて死んでしまった。

《原題》「賽呼和柴夫」119-125 頁。ガチンソー¹⁵口述 1992 年収集整理

(2) 3 粒のゴマの種で苦勞を請け戻す

むかしむかし、苦勞人がいて、金持ちのために半生を苦しい労働をして過ごした。しかし、毎年年末に棒給を受け取る時になると、金持ちはいつもソロバンを持ち出し、さまざまな口実を作ってはあれこれと差し引き、苦勞人が1年で稼いだ手間賃は差し引かれて、残りはいくらもない。一家を養うことはまったくもってできない。怒りに任せて、苦勞人は人から3粒のゴマの種を借り、志をたて、その3粒のゴマの種を使って、数十年負ってきた苦しい労働を請け戻すことにした。

苦勞人は3粒のゴマの種を懐にしまい、数日歩いて、日が暮れる前に苦勞人がかつて働いたことがある金持ちがやっている宿屋にやってきた。寝しなに、苦勞人はわざと店主に尋ねた。

「すいません、尊敬する店主さま、おまえさまのところにはネズミはいますか。」

「おまえはネズミについて聞いてどうするのだ。」

「ええ、実を言えば、わたくしめはこのたび外出するとき、3粒のゴマの種もっているのですが、ネズミに盗まれて食べられてしまうのではないかと心配しているのです！」

と苦勞人は丁寧に言った。

「へえー、わたしはてっきり何ごとかと思いましたよ。たかが3粒のゴマの種ではないですか。なんにも大したことではないでしょう！」

「おや、おまえさん、この3粒のゴマの種をバカにしないでおくれ。これは普通のゴマの種ではないのです。もし、本当にネズミに食べられたら、おまえさんは弁償することはできません。」

「あはは。」

¹⁵ 中国語表記は嘎庆苏で、これまでガチンスと表記していたが、ガチンソーに訂正する。児玉（2021）で「ガチンガ」としているのは誤りで、ここで訂正する。オールドス地域の発音についてご教示くださったオールドスの友人と調べてくださったゲゲレルさんに感謝の意を表します。

店主は聞くと、あざ笑って言った。

「おまえさんもわたしをあまりにバカにしているよ。このたったの3粒のゴマの種なんぞをわたしに見せびらかしてくれただな。もういいですよ。おまえさんは安心して寝なさい。もし夜中にネズミが本当に出て来ておまえの3粒のゴマの種を食べたら、わたしが弁償しましょう。」

苦労人は聞いてうなずき、店主の前に3粒のゴマの種を取り出し、オンドルの上に置いた。

朝起きて、苦労人は見ると、3粒のゴマの種はやはりネズミに食べられていた。苦労人は店主を探しだし、勢いよく言った。

「お前さん、ほら見なさい。わたしは、ネズミがわたしの3粒のゴマの種を食べられてしまうのを心配していると言ったのです。しかし、お前さんはむしろ、とりあいませんでした。ほら、どうしてくれるのだ?!」

「おまえさんに弁償してやるだけのことですよ。そんなに大ごとですか」

と店主は言い、

「ですが、わたしにはゴマの種がありませんので、メン一杯で弁償します。これで十分だろう！」

苦労人は言った。

「メンは要りません。あのゴマの種を食べたネズミがほしいです。」

店主は半日かけて、ネズミを捕まえて苦労人に弁償するほかなかった。

苦労人は一匹の活きたネズミをもって続けて道を急いだ。日が暮れる前に、その金持ちがやっている別の宿に来て泊まった。寝しなに、苦労人はまた店主に尋ねた。

「すいません、店主さん、お前さんのところには猫はいないよね？」

「猫について聞いてどうするのだい？」

「わたしは一匹の活きたネズミを連れてきます。それで、猫に食べられてしまうのではないかととても心配しています。」

「おいおい、本当に変な奴だなあ。出かけるのにネズミを連れてくるなんて。」

店主は言った。

「一匹のネズミなんて大したことないだろう。もし本当にわたしの猫に食べられたのなら、おまえさんに弁償するだけです。」

「本当だろうな？」

「もちろん、本当だよ！」

苦労人は店主がこのように言ったのを聞くと、店主の目の前でネズミをドアの後ろ側に括り付け、その後でオンドルの上に寝た。

朝起きだしてみると、ネズミは猫にとっくに食べられていた。苦労人はまた店主を探し出して言った。

「お前さん、見なさい。わたしは猫がわたしのネズミを食べてしまうのを心配していると言ったのです。しかし、お前さんは心配することは無いとかたくなに言い張った。今、ほら、どうしてくれるのだ?!」

店主は言った。

「おまえさんに弁償してやるだけのことですよ。」

店主は猫を弁償として苦勞人にあげた。

苦勞人は猫を抱えて、その金持が経営している別のもう一つの宿屋にやってくる、店主に尋ねた。

「おまえさんのこの店には犬はいないだろうね。」

「犬について聞いてどうするのだい？」

「わたしは一匹の猫を連れてきます。犬にかみ殺されてしまうのをとても心配しているのです。」

「かみ殺されたら、わたしはおまえさんに犬一頭弁償するだけです。」

「本当だろうな。」

「本当だ！」

夜に猫は走って飛び出していき、本当に犬にかみ殺されてしまった。日中、苦勞人は店主に弁償させた。店主は猫をかみ殺したその犬を弁償として苦勞人に渡した。

苦勞人は犬をつれて、またその金持ちがやっている別の宿屋に向かって歩いて行った。日が暮れる時にちょうど宿についた。寝しなにまた店主に尋ねた。

「尊敬する店主さま、おまえさまのところにはラバはいますか。」

「ラバについて聞いてどうするのだい？」

「わたしは一匹の犬をつれてきます。ラバに蹴られて死んでしまうのをとても心配しているのです。」

「ははっ、一匹の犬ごときでお宝扱いかい？本当に田舎者だ。」

店主は納得できない様子だった。

「ああ、これはただの犬ではないのです！」

店主は面倒になって、てきとうに言った。

「分かった。分かった。もし本当にラバに蹴られて死んだのなら、わたしはおまえさんにラバ一頭を弁償しますよ。」

「その話は本当ですか。」

「もちろん本当です。」

「後悔しないですか。」

「何を後悔するのだ！」

「反故にはできませんよ。」

「反故にしないよ！」

苦労人は犬をラバ小屋の中に括り付け、次の日の朝、行って見てみると、本当に犬はラバに蹴られて死んでいた。苦労人は店主を呼び出し、わめきたてて、店主に賠償を求めた。

約束が先にあるため、店主は泣き寝入りするほかなく¹⁶、文句は言えなかった。苦労人にラバを弁償してあげるほかなかった。

苦労人はラバに乗って、また出発した。苦労人が次に向かったのはかつて働いたことがある別の金持ちの家だった。

《原題》「三顆麻籽賤血汗」132-134 頁。バーバー口述 1988 年収集整理

(3) 余三と謝四¹⁷

余三はとても食欲で決して飽き足りることがなく、しかも横暴で道理をわきまえない金持ちだった。10 年前に余三は使用人として謝四という若者を雇った。謝四は正直でおとなしく、真面目に仕事をする人だった。10 年間、謝四は苦労を堪え忍び、余三のために碾き臼を回し、農作業をし、柴を背負い、家畜の糞を拾い、家畜を放牧し、春夏秋冬、年中休む暇もなかった。10 年後に、謝四は故郷の両親が心配になり、妻と子どもたちを恋しく思い、これまでの手間賃を精算して一刻も早く家に帰ろうと思った。余三は算盤をばちばちはじきながらきてきばきと、あれやこれやと差し引き、結局渡したのはわずか 5 キロのごま油だけ。それが 10 年間汗水たらして稼いだ金だと誰が想像したであろうか。

謝四は 5 キロのごま油を手にして、考えれば考えるほど腹が立ち、考えれば考えるほどみじめな気持ちになった。心の中で「余三め、おまえは本当に心が残忍だ、10 年間昼となく夜となく、朝早くから暗くなるまでお前のために働いて、できるだけ多く稼いで家族を養うことを励みにしていたのに、10 年で稼いだのがわずか 5 *_ロのごま油だとは夢にも思わなかった。」目を見開いて空を見上げ、言い分があっても訴えるところがない。謝四はどうしようもなく心の中の怒りを収めるために、ごま油 5 キロをもって寺院に行きお布施しようとした。

ある日、寺院の住職は小僧に言いつけた。

「明日早朝に、お前さんは寺院をすみずみまで掃除してきれいにし、素晴らしいお布施をしてくださる施主さまを迎える準備をなさい。さらに、わたしが会いたい言っているとその方に伝えなさい。」

2 日目、小僧は夜明けに起きて寺院を掃除してきれいにした。果せるかな、正午になると、ぼろをまとった人がやって来て、ごま油 5 キロをお供えた。小僧は心の中で思った。「ご住職さまもあま

¹⁶ 原文は「啞巴吃黃連」で、啞者が黄連を飲むの意。苦くても口に出せない苦しみ。転じて、泣き寝入りしなければならない苦しみの意。

¹⁷ 余三より、張三が知られている。余三と謝四で、日本でいう熊公八公。本民話集には「2人のけちん坊」という張三と謝四を主人公とする民話も所収されている（児玉訳2016：129-130）

りにも見る目がないなあ、ごま油 5 ㌔で素晴らしいお布施だなんて。」

小僧は住職の指示に従って言った。

「ご住職さまがおまえさんに会いたいと言っています。」

謝四は尋ねた。

「どこにいらっしゃいますか。」

「奥です。」

と小僧は答えた。

謝四は奥に歩いて行くと、住職は円卓いっばいに精進料理を並べて謝四の来訪を待っていた。住職は謝四を見るとすぐに、急いで立ち上がり、笑みを浮かべて言った。

「ああ、どうもいらっしゃいましたね。早くお座りください。早くお座りください。」

謝四は身に余る厚遇を受けて非常に喜び驚き、いつときどのようにしたらよいか分からなかった。しかし、疲れて空腹だったので、辞退せず、座って住職と食事をとった。

食事後、住職は言った。

「謝四さん、あなたを案内して寺院をまわりましょう。」

平坦な小道に沿って、2人は話しながら歩いた。謝四は自分の運命を嘆き、悲しんだ。住職は謝四の不注意を利用して、法術を施した。この時、道端の青々と茂る樹木の中に、礼帽を頭にかぶり、黒い着物を身にまとい、竜の頭の握りのある杖を手にした人がぼんやりと見えたが、すぐに見えなくなった。住職は言う。

「謝四さん、見えたでしょう。あれはすなわちあなたです。」

謝四は不思議に思って尋ねた。

「わたしがどうしてこのようになれるのでしょうか。」

住職は言った。

「苦しい時が終わり、幸せな時がやってきます。おまえさんはいい生活を送れるようになりますよ。」

またしばらく歩くと、住職はさっと法術をかけ、道端に一匹のしっぽがない痩せたオスロバが駆けだしてきた。全身一本も毛が生えておらず、醜かった。住職は謝四に言った。

「これはすなわち余三です。余三は残忍で、人としてあるまじき行いをしたため、死後しっぽがないオスロバになります。おまえさんは明日余三のところへ再び行き、ごま油 5 キロすべてをお布施したところ、寺院の住職は大布施をしたとおっしゃった、と言いなさい。このようにすると、余三は必ずわたしのところにやってきます。」

謝四は住職の言いつけにしたがって、余三の家に行った。余三は出て行ってから何日もたった謝四がまた戻ってきたのを見て、不思議がって聞いた。

「お前さん、何をしにまた戻って来たのかい。」

謝四は嬉しそうに言った。

「おまえさんのおかげです。10年間でわたしに10年分のごま油を稼がせてくれました。わたしはそのごま油5キロをお布施したところ、ご住職さまは大布施をしたとわたしをほめたたえてくれました。さらにわたしは今後よい生活を送る、とおっしゃいました。」

余三は聞くに値しないと、謝四の話をさえぎり、言った。

「お前のような貧乏人が偉そうな顔をして・・・ごま油5キロで大布施というのであれば、旦那の俺様がどのように明日お布施に行つてやるかを見ていなさい。」

と言うと、続けて長男を呼んでこさせ、言いつけた。

「おまえは今晚あの2頭のラバにたっぷり食べさせておいて、その2頭に銀を積んで背負わせなさい。」

2日目、余三は銀を背負わせた2頭のラバを連れて、寺院の方に歩き出した。

その日、住職はまた小僧に言いつけた。

「早朝に寺院を掃除しておきなさい。正午にわずかなお布施をする人がやってきます。その人がわたしに会いたいのなら、彼を来させなさい。会いたいと言わなければ、そのまま帰させなさい。」

小僧は寺院をきれいに掃除した。正午になると、果せるかな、お布施をする施主がやって来た。その人は絹織物の服をまとい、2頭のラバを連れていた。銀を背負わされた2頭のラバは重くて寺院に入った途端、臥せって起き上がられなくなってしまった。

小僧は前の方に進み出て尋ねた。

「施主さん、お前さんのあの2頭のラバが背負っているのは何ですか。どうしてラバは疲れ果ててこのようになのですか。」

余三は得意気に言った。

「もちろん銀です。」

小僧はずっしりと重い銀を見て、心の中で思った。「ご住職はますますダメになってしまった。数日前に乞食のような恰好の施主がやってきてごま油5キロを持ってきたのを、師は大布施をしたと言う。今日来た施主はこんなにたくさんの銀を持ってきたのに、むしろちっぽけなお布施と言う。」余三は小僧が何も言わないのを見て、尋ねた。

「お前さんの師匠は。」

「奥です。」

と小僧は答えた。

「会いたい。」

と余三は偉そうに言った。

「自分で行ってください。」

小僧は答えた。

余三は奥に着いた。住職は食事の準備しておらず、顔には笑みも浮かべていない。2人はしばらくの間、向かい合って座っていたが、余三から口を開いた。

「住職さま、わたしの今後の生活を占ってください。運勢はどうでしょうか。」

住職は言った。

「いいでしょう。わたしたちは外に出て少し歩きましょう。」

2人は平坦な小道に沿って歩いた。突然、青々と茂った樹木の後ろから黒い着物を着て、頭に礼帽をかぶり、竜の頭の握りのある杖を手にした人が突然現れた。ぱっと現れてすぐに見えなくなった。

「この人は誰ですか。」

と余三は尋ねた。

住職はおちついた様子で言った。

「これは謝四です。この人は誠実で温厚で、苦しみやつらさを堪え忍び、ついには裕福で幸せになれるのです。」

余三は茫然として、謝四の将来の光景をどのようにしても思い描くことができなかった。

しばらくして、道端にまた毛がなくてしっぽがないオスロバが突然現れて、またたく間にまた見えなくなった。

住職は振り返って余三に向かって言った。

「お前さんの死後はこのようです。」

余三はぞっとして、心の中で考えた。「まずい。自分は死後ロバになりはて、しかも非常に醜いロバだ。」そこで、慌てて住職に向かって言った。

「ご住職さま、どうかわたくしめをお救いください！」

住職は言った。

「救うことはできません。おまえさんは自分がどれだけ多くの残忍なことをしてきたのかを覚えているだろう。どれだけ多くの人びとにひどい目に合わせたのか。これを自業自得と言うのだ。」

余三はびしょりと汗をかき、住職に懇願して言った。

「助けることができないのであれば、どうか、たとえロバに生まれ変わるとしても、毛をはやし、しっぽがあるようにしてください。そうでなければ、醜すぎます。」

住職は言った。

「それは可能です。ただし、おまえは3つのことを成し遂げなければいけません。」

余三は慌てて尋ねた。

「どんな3つのことですか。」

住職は余三を見つめて言った。

「おまえさんは急いで帰っておまえの長男の頭をめちゃくちゃにたたきつぶし、次男の腰を踏み折り、三男を大勢の人馬が行きかう一本道に放り出して踏みつけさせなさい。」

余三はお布施が終わって家に戻ると、臥せってしまった。丸一週間、飲み食いをする気持ちが起こらず、黙々として物を言わない。長男、次男、三男に会うとすぐにしきりに嘆息する。余三に尋ねても何も言わず、家族をひどく慌てさせた。

ある日、娘が実家に帰ってきた。父が臥せって起きないのを見て、家族みな悶々として悩んでいるので、余三に尋ねた。

「父上、お布施は本来よいことです。なのに、なぜ戻ってきてから心配で気が気でない様子で床に臥せって起き上がらないのですか。なにか大変な目にあったのではないのですか。腹にため込んでいることを話してみたら、わたしは方法を考えて助けることができるかもしれません。」

余三は娘の話聞いて、心の中でそれも正しいと考えた。そこでお布施の経緯を娘に詳しく話して聞かせた。娘は聞いてから少し考えて言った。

「父上、この3つのことはそんなに難しいことではありません。長男の頭を叩き潰すというのは、一番上の兄の頭を叩き潰すということではなく、父さんという道義を欠いた人の枡を叩き潰すということです。次男を踏み折れというのは、父さんという道義を欠いた人の棹秤を折るということです。三男を大勢の人馬が行きかう道に放り出して踏みつけさせなさいというのは財産を使って橋を修理し、徳を積みなさいということです。父さん、忘れませんか。ある年、父さんは自分が静かに過ごすために、人びとが歩くのに都合がよい橋を壊してしまい、近隣の人びとは出かけるのにととも面倒になりました。父さん、この3つのことを成し遂げたら、今後は二度と道義を欠くようなことをしてはいけません。」

余三は娘の話聞いて、自分は確かにたくさんの道義を欠くことをしてきたと思った。枡、棹秤、橋は最も人心を得ない3つのことである。内心恥ずかしくて、頭を垂れた。

《原題》「余三与謝四」111-115頁。何玉柱口述 1991年銭世軍収集

(4) ハーンによる息子の嫁選び

むかしむかし、メルゲンという名の賢いハーン（王）がいた。ハーンは若い時に、国を傾け滅ぼすほどの美女を妻に娶った。しかし、この花も恥らうほどの美貌をもつ国一番の美女は逆にとても愚かだった。結婚1年後、この美しく愚かな妻は愚かではないが、決して賢くはない息子を一人産んだ。メルゲン王は将来王子が王位を継承した後に重責を引き受けられるかどうか心配した。そこでハーンは息子のために国中で最も賢い娘を息子の嫁に娶ることにした。それは王子が王位を継承した後に息子が国政の重要な案件を処理するのを補佐するためであった。

幼い王子は日一日と成長し、王子が 16 歳になるのを待って、メルゲン王は大臣 3 人を呼び出し、思っていることを打ち明けた。ハーンはこの 3 人の大臣に、国中をまわって息子の嫁として最も賢い娘を選びだすよう命じた。

3 人の大臣はハーンの命令を承った後、従者を連れて、3 方向に分かれて各地に最も賢い娘を選びに行った。3 年歩き回っても、誰も特別賢い娘に出会うことは無かった。あらかじめ決めておいた日時に合流地点に行くしかなかった。3 人の大臣は心中おだやかでなかった。しかし、期日はすでに来ており、さらに引き延ばすことはできず、ハーンのもとに帰るほかなかった。

戻る道中で、柴を背負った 3 人の娘が向こうからやってくるのに出くわした。前を歩いている 2 人の娘は幾重にも何層の服を着ていたが、後ろを歩いている 1 人の娘は反対に背中をむき出しにして柴を背負い、上着を脱いで胸の前に巻いていた。

3 人の大臣はこの娘を少し奇異に感じた。心の中で、この娘は少し特別で、もしこの上なく賢い娘でないのなら、きっとこの上なく愚か娘に違いないと考えた。大臣 3 人はひそひそと、ひとしきり話をした後、その娘に尋ねた。

「おい、娘さん！柴を背負っている他の人はみな何層も服を着て体を保護しているのに、おまえさんは反対に背中をむき出しにして柴を背負っていますね。まさか、柴が肉と皮を突き刺して痛いのは平気なのですか？」

娘は答えた。

「衣類は綿で作られており、身体は健康からなります。そのため、衣類より背中をむき出しにして背負った方が丈夫で耐久性はるかにあります。たとえ少し皮が擦り切れても、数日たてばひとりでよくなります。ですが、衣類は破れたら、自分でもとの状態に戻りません。別の新しい衣類に変えなければならない、大変もったいないです。」

3 人の大臣は、この話は確かに道理があるようだと思い、互いに目くばせをしい、また娘に尋ねた。

「おまえさんの家はどこですか。わたしたちはお前さんの家に行き、足を休めたい。」

「わたしの家は川の西側にあります。」

と娘は答えた。

「どれくらい遠いか。」

「川を渡りまっすぐ行けば、だいたい 3 日の路程で、川に沿って回り道をする、半日もかからずに家に着きます。」

3 人の大臣はどういう意味か解せず、この娘の話には問題があると思った。こんなに幅の狭い小さな川で、川を渡ってまっすぐ行くのがなぜ川に沿って回り道をするより時間がかかるのか？どう言ったにせよ、回り道に行くのは常にまっすぐ行くのより早いわけがないだろう！？大臣 3 人は何が何で

も、ウマに乗って川の中を歩いていき、川を渡ってまっすぐ行こうと決めた。しかし、数歩も行かないうちに、ウマの脚は泥にはまり込んでしまった。ウマを引っ張り出すために、人もまた川の泥にはまり込んでしまい、このようにして三日三晩難儀し、どうにか、もがくようにして川の対岸にたどりついた。この時、3人の大臣はようやくはたと思い至り、娘が言ったその言葉の意味をようやく理解した。

大臣3人は従者をつれて娘の家にやってきた。娘はとっくに茶をわかし、ご飯を準備して、モンゴル・ゲルの中で彼らがやってくるのを待っていた。彼らがうろたえて困り果てた様子なのを見て、ふと思わず声をたてて笑った。

大臣3人は十分に飲み食いした後、少しずつ元気を取り戻してきた。大臣3人はまわりを観察し、ほかに人がいないのを見て、娘に尋ねた。

「お前さんの家は何人家族だい？」

娘は答えた。

「片手を出して手の指を数えたら、1本の指は暇で無用です。」

3人の大臣はちょっと考え、4人家族だと分かり、また尋ねた。

「それなら、3人はどこに行ったのだ？」

娘は答えた。

「父は健康な体で病気を探しに行きました。母は家の財産をもって乞食に行き、兄は油ランプに明かりを探しに行きました。」

3人の大臣は互いに顔を見合わせ、しばらくそれがどういう意味か理解できなかった。いっそ泊まって、娘が話したことは結局どういう意味なのかはっきりさせようと思った。

夕方、娘の父親はほろ酔い加減で、千鳥足で帰ってくると、家の門に入り横になるとすぐに寝てしまった。しかし、飲みすぎで、気持ち悪く一晩中うめいていた。

次の日、娘の母親が帰ってきた。娘の母親は友人の結婚式の返礼に2日間家を空けていた。

しばらくして、娘の兄がウマをひいてゴマ油を積んで帰ってきた。というのは、娘の兄は油屋に行き、油ランプを取り換えに行っていたのである。

大臣3人は娘が言っていたそれぞれの話を理解すると、この娘がとても賢いことに気が付いた。大臣3人は宮廷にもどり、メルゲン王にいかにして賢い娘を見つけたのかその経緯を上申した。メルゲン王は信用できず、自らその娘が本当に賢いのかどうかを探ろうと考えた。ハーンは大臣にすぐに人を遣わしてその娘の父親に宮廷に出向くよう命じた。

娘の父親は招かれてきた。メルゲン王は娘の父親に向かって言った。

「朕は明日お前の家を訪問したい。おまえは朕のために3つの食品を必ず用意しろ。1つ目は骨で包んだ肉、2つ目は肉で包んだ骨、3つ目は種オスのチーズだ。」

しかしこれは娘の父親を本当に悩ませた。この3種の食品は食べたことは言うまでもなく、聞いたことすらない。娘の父はとてもの焦って、悶々として悩みながら、家に帰ってきた。娘の母親は夫が話して聞かせるのを聞いて、もっと困り、焦ってとうとう泣き出してしまった。その時、娘が帰って来て、このありさまを見て慌てて尋ねた。

「父さん、母さん、なぜそのように悲しんでいるのですか。一体何が起きたのですか。」

父親は言った。

「ああ、メルゲン王は今日、人を派遣してわたしを呼び出し、明日ハーンがわたしたちの家の客になるから、わたしたちに必ずハーンのために骨で包んだ肉、肉で包んだ骨と種オスのチーズという、これら3種の食べ物を用意するように言ったのだ。この3種の食品は食べたことは言うまでもなく、父さんは聞いたことさえない。どこへ行き、これら不思議な食べ物を手に入れたらよいのか。さらに、明日までわずか一晩の時間しかない。わたしたちに翼があっても、これらの食べ物を手に入れるの間に合わないのだ！」

娘は言った。

「父さん、母さん、どちらも焦る必要はありませんし、こんなつまらないことで頭を悩ます必要はありません。明日メルゲン王が来たときに、父さんは東の小屋の中で横になっていて、出てこないください。母さんは何かしなければならぬことをしに行ってください。ここでのすべてはわたしが対応します。

「おまえになんかいい方法があるのか？」

両親は気をもんで尋ねた。娘は笑って答えなかった。

次の日の午前、メルゲン王は果せるかな、従者を率いてやってきた。娘は堂々とした様子で、メルゲン王一行を家の中に迎え入れ、彼らが腰を下ろした後、娘はまず大盆に載せたゆで卵を持ってきて、次に大盆に載せた赤なつめを持ってきて、一つ一つオンドルの上のテーブルの上に置き、メルゲン王に召し上がってもらった。

メルゲン王はこの2つのお盆の上の食物を見て、娘が聡明で機知に富むのにひそかに感心した。メルゲン王は礼儀正しくこの2種類の食べ物を少し味わった後に尋ねた。

「もう一種の食べ物、種オスのチーズははどうしてまだ持ってこないのかね？」

娘は言った。

「分かりません。しかし、わたしの父は必ず知っているはずですよ。」

「それなら、お前の父さんは？早くわたしのところに呼んできなさい。」

「父は来ることができなくなりました。父はちょうどいま、東の部屋の中で子どもを産んでいます。」

メルゲン王は聞くと、腹を抱えて大笑いして言った。

「わっはは、世の中のどこに子を産む男がいるのか？この娘の話は本当に突拍子もないわい。」

娘は慌てずに問い返した。

「それでは王様にお尋ねします。種オスはミルクを出すことができますか？種オスのミルクがないのに、何をもって種オスのチーズを作るのですか？王様、種オスのチーズというこの語も突拍子もない話ではないか、と考えてみたことはありませんか？」

メルゲン王はいつとき、返事の言葉が無かった。そこで、モンゴル・ゲルを出て、庭の外に出た。このとき、風が起こって、沙米¹⁸がコロコロと前に転がっていった。メルゲン王は王について外に出てきた娘に尋ねた。

「おまえさんはこの沙米がどこに行くのか尋ねたことはないのかい？」

娘は慌てずに答えた。

「わたしはとっくに尋ねたことがあります。」

「沙米たちはなんて言ったのだい？」

「沙米たちは言いました。

種がよいので、地面に落ちればすぐに芽を出すことができ、
根が弱いので、風にのってどこまでもさすらい、
平らな土地を思い切り走り回り、窪地があれば、そこに安住する。
天の果て、地の果て、どこにでもわたしの足跡がある。

メルゲン王は聞くと、心の中でこの娘は確かにとても賢いと思った。出かける前に、王は娘に対し、言った。

「おまえは戻って父親に言いなさい。おめでたい日時に、めでたいことがお前さんの家に訪れるであろうと。しかし、おまえの父親は必ずわたしに灰で作った 981 個のウマの足かせを準備しなくてはならない。ちゃんと作ることができたら、わたしは数に従って馬を送り、結納とし、作ることができなかったら、朕はおまえの父親をわたしの終身の馬夫にし、家に帰ることを禁じる。」

娘はメルゲン王の話を父に伝えた。父は聞くやいなや、また頭を抱えた。父は言った。

「世の中のどこに灰で作った馬かせがあるのか？灰でどうやって馬かせを作ることができるのか。これはわたしに死を迫っているのではないか。」

母と兄もうろたえておろおろした。だが、娘は笑って言った。

「これはむずかしいことですか。これは本当にもっと単純にすぎないことです。わたしたちは草で縄

¹⁸ 中国語名で、別名、沙蓬とも言う。モンゴル語でチョリヒル (čuliqir) という。学名は *Agriophyllum pungens* (Vahl) Link ex A. Diet、アカザ科 1 年生草本。飢饉の際には食料とした (モスタールト 1985 : 79-80)。

をよって、馬の足かせをつくり、その後で一つ一つを平らに庭の中に並べて、乾燥させた後、火をつけて燃やせば、火が燃え尽きた後、地面の上には草の馬かせは灰の馬かせになるのではないのでしょうか？」

両親と兄は皆喜んだ。一家4人で草を刈るのは刈り、草で縄をなうのはない、1ヶ月もたたずに、981個の草の馬かせが出来上がった。それらを庭いっぱい敷きひろげ、乾かした。

メルゲン王は自ら灰の馬かせを検分しにやって来た。娘は草の縄で編んで作った馬の足かせ一つ一つに火をつけ、燃え尽きるのを待ち、なんと庭いっぱいの草の馬の足かせは灰の馬の足かせになった。メルゲン王がちょうど見入っていたところ、娘は品よく礼儀正しい様子で王に対して言った。

「尊敬するハーンさま、灰の馬かせを、要求通りに数をそろえてあなた様にお作りいたしました。どうかご自分でお確かめの上、お受け取りください。」

メルゲン王はこの情景を見てひそかに素晴らしいと称賛せずにはいられなかった。

ほどなく、メルゲン王は人をやって娘の両親に981頭のウマを結納品として送った。またほどなく、この賢い娘は宮廷にメルゲン王の息子の嫁として迎えられた。

《原題》「汗王选媳」126-131頁。ガチンソー口述 1992年收集整理

(5) 娘婿3人による長寿祝い

むかしむかし、年老いた金持ちには3人の娘がいた。長女は挙人¹⁹に、次女は秀才²⁰に、三女は百姓に嫁いだ。金持ちは長女と次女の婿を高貴な婿とし、逆にいつも三女の婿を見下していた。

8月15日、金持ちは60歳の誕生日を迎えるので、3人の婿たちはそろって金持ちの長寿祝いに行った。家の中には多くの来賓がいて、その席で、金持ちは賓客の面前で自分には2人の才能ある婿がいることを見せびらかすために、言った。

「婿どのよ、1人ずつ詩を作って客人たちの酒席の興趣にひと肌脱いでください！」

言い終わると、金持ちは自らお題を出し、かつ、詩の区切りの終わりに必ず「圓又圓（まん丸）」、「少半边（半分足らず）」、「乱糟糟（ひどく乱れているさま）」、「静悄悄（ひっそり静まりかえっている）」の3文字を用いるように求めた。

義父が言い終わるとすぐに、でしゃばるのが好きな長女の婿がまず立ち上がり、賓客たちを見渡し、一人悦に入って語んじた。

「15日の月はまん丸で、18日、19日で半分足らずになってしまう、

¹⁹ 科挙の郷試に合格した人。

²⁰ 科挙の地方で行う院考に合格して秀才の資格を得て県学に入学した者。

満点の星たちは散らばっていて、黒雲が遮にやってきてひっそり静まりかえっている。」

長女の婿が諳んじ終わると、次女の婿は負けじと咳払いして諳んじた。

「長寿祝いの月餅はまん丸で、半分食べて、残っているのは半分足らず、

ネズミが出て来てぐちゃぐちゃになり、家猫がやってきてひっそり静まり返った。」

そばに座っていた三女の婿は作詩とは何か知らなかったが、2人の義兄たちの詩を聞いて、心の中で作詞も大したことはないと思った。そこで慌てず続けて諳んじた。

「義父と義母はまん丸で、一人死んで半分足らず、

家族全員泣いてひどく取り乱し、一斉に死んでひっそり静まりかえる。」

金持ちは聞くと烈火のごとく怒ったが、かえって一言も言葉が出なかった。

《原題》「三个女媳拜寿」142頁。楊三口述 1993年收集整理

(6) わたしにかまうな、新聞に掲載されることが重要である

文化大革命²¹時代に、ある村の若者が新聞に英雄人物を宣伝する文章が掲載されているのを見て、納得できなかった。その若者は英雄になるのはとても簡単で、機会さえあれば、なれるものだと考えていた。

彼は英雄になりたかった。その理由は、英雄は新聞に掲載され、勇ましく大変有名になれることがうらやましかったからである。しかし、ずっと英雄的業績をつくる機会に恵まれることはなかった。

ある日、その若者は他人が不注意なのにつけ入り、生産隊の中の麦を積み上げたところにマッチで火をつけた。火を付けた後、彼はすぐに火をたたき消さず、あたりをきよろきよろ見回し、彼のために宣伝や証人になる誰かが通り過ぎる時に火を消しに行こうと待っていた。彼は無名の英雄になりたくなかったのだ。だが、待っても待っても一向に来ず、そのため、火の勢いはますます盛んになり、そのときようやく焦ってこわくなり、何も顧みず、大火に飛び込み、なんとか火を消そうとした。

社員たちは火事と聞いて急いでやってきて、大火をなんとかたたき消した。その若者はやけどで重症を負い、病院に搬送された。記者がやってきて、その若者のベッドに身を乗り出し、英雄は意識がもうろうとする中、集団の財産をいつも心において忘れない本心や勇ましい言葉が出るのを待っていた。それは、心の中の深いところにある特別優れた点を掘り起こし、人を深く感動させる記事を書くためであった。

その若者はとっくにその点を予想し、ケガをする前にすでに大言壮語の原稿を頭の中で作っていた。それは、「わたしにかまうな、集団の財産を救うことが重要だ・・・」

²¹ 1966年から1976年にかけて、中国全土で展開された政治・思想・文化闘争。

しかし、嘘がまことになり、重傷を負ったために、本当に意識が戻らず、うわごとを言ってしまった。
「わたしにかまうな、新聞に掲載されることが重要である。」

記者は愕然とした。

のちに、公安部が捜査し、放火者はあることかあの消火した若者であった。若者の「英雄」になる夢はかなうことなく、若者は刑務所に入るようになった。

《原題》「不要管我登报要紧」143頁。王勝利口述 1993年收集整理

(7) ナーダムの由来

古い歴史をもち不思議に満ちたオルドス草原に、今に至るまで伝統的な娯楽活動が残っている。それはすなわち1年に1度の「ナーダム」である。

毎年、水と草が豊かで、家畜が肥えている8、9月に各旗県は大規模で盛大なナーダムを開催する。会期は5日間から10日間などさまざまである。ナーダムで実施する種目は主に競馬、相撲、弓射、綱引き、5種の球技試合、歌と踊り、演劇と物質交流などである。

ナーダムの時期はちょうど秋の空が高く、空気がすがすがしい季節で、平野は深緑色で、人びとの気分は広々としてさわやかである。とりわけ草原の6種の家畜²²の成長が盛んで、田畑では豊作はもうすぐで、農牧民はみな喜びを顔に浮かべている。農牧民たちはみなウマやバイク、馬車、車で、四方八方から人民政府所在地のナーダムにやってくる。農牧民たちは三々五々連れ立ってやってくるものもあれば、一家総出で来るものもある。みな、旧正月と同じように祭日の盛装を着て、喜びにあふれている様子でナーダムに楽しく集い、好きな種目と演目を楽しむ。

ナーダムはモンゴル語の音訳で、意味は娯楽やゲームである。ナーダムすべての競技と演目の中で、とりわけ注目を集めるのは競馬と相撲と弓射である。モンゴル男子の「三つの競技」と呼ばれる競馬と弓射と相撲はナーダムの伝統的な競技種目である。そのなかでも、モンゴル語で「ブフ」と呼ばれる相撲は力と知恵比べである。競技が始まると、相撲選手は伝統的な特色に富んだ相撲服を身にまட்டுて登場してくる。皮革もしくは帆布で作ったベストの上にきらきらと光るものを縫い合わせ、さまざまな色のリボン、刺繍をほどこした乗馬ズボンとブーツを組合わせている。がっしりとした体つきの青年と壮年はみな気を奮い立たせて、競技場に入るとすぐ伝統的な相撲の舞を踊り、儀礼をしたのち、競技は正式に始まる。

「ナーダム」はオルドス・モンゴル族の人民の心のなかで、古くまたかつ神聖なもので、それはナーダムが長い歴史をもつからである。伝えられているところによれば、早くも700年以上前にチンギ

²² 中国語ではブタ、ウマ、ウシ、ヒツジ、ニワトリ、イヌの6種の家畜を指す。モンゴルでは五畜、ウマ、ウシ、ラクダ、ヒツジとヤギの5種である。中国語の表記に合わせた可能性が高い。

ス・ハーンがホラズムを征服した勝利を祝うために、イルティッシュ河畔で盛大なナーダムを挙げた²³。ナーダムでは弓射と相撲²⁴の競技がおこなわれた。それ以来、ナーダムのこの娯楽形式が草原に広まった²⁵。その後、「ナーダム」を開くとき、さらに競馬を種目に加えた部族もいた。フビライ・ハーンの時代になると、競馬、弓射と相撲²⁶は「ナーダム」競技の定番の種目となった。

「ナーダム」を開幕するときにはいつも祝詞があり、モンゴル族の年長者が「サーリーンデージ（神聖で純潔な馬乳酒²⁷）をなみなみとついで銀の碗とハダッグ²⁸を捧げもち、声高々に「ナーダム」の祝詞を朗唱する。大昔の「ナーダム」の祝詞はおおよそ以下のようであった。

リズムよく奏でる馬頭琴の音色、
抑揚があり感動的である；
この上なく神聖で純潔なハダッグ、
風によってひらひらとはためている；
伝統の3種の「ナーダム」
途切れることなく続いてきた：
勇敢なモンゴル族の力士が
列をなして登場する
．．．

それぞれの競技種目開始前ごとに高らかに祝詞を唱えてから、競技の幕が開く。たとえば、競馬の前には「駿馬賛」を、弓射の前には「弓射賛」を高らかに唱えるなどである。

ある「弓射賛」はこのようである。

ずっしりと重い弓を持ち上げ、
金色の鋭い弓をかまえ、

²³ 1224 年秋にチンギスがホラズム遠征からの帰途上、イルティッシュ河畔に宿営し、開催した遠射大会のこと（中村・松川 1993：24）。原典ではイルティッシュ河畔と訳したところは布哈蘇齊海（buhasujihai）となっているが、中国語表記でどこを指すのかは不明。

²⁴ 相撲競技が開催されたかどうかは不明（松川 1998：93）。

²⁵ 現在のナーダムと同じかたちで歴史にあらわれるのは 1640 年代に初代ジェブツンダムバの即位を記念して開かれたという記録が最初とされる（松川 1998：93）。

²⁶ 相撲は清朝皇帝への奉納というかたちで奨励され、18 世紀以降になると職業力士が養成されはじめた（松川 1998：93）。

²⁷ 原書では「鮮乳」となっており、直訳はミルクであるが、馬乳酒を指している（サランゲレル 2017：19）。

²⁸ モンゴル語で、モンゴル人が尊敬の念を表すのにささげる絹布。

弓を引くのはまるで満月のよう、
ぱっと矢を放ち、
高くそびえたつ山を射倒すことができる
高く飛ぶガンを射抜くことができる
お前を祝福しよう、
堅固なる大力士。

おまえは英雄魂の化身だ
おまえは無敵の象徴だ
サイの角で作った弓の背
青黒色の玉で作った弓心
黄金で作った胸あて
白のマギガイで作った取っ手
ターコイズで作った弓筈
生糸で作った弦
青銅で作った矢じり
ハヤブサの羽で作った矢羽根
この弓は万事めでたく順調であることを示し
身に携えて出陣すれば必ずや百戦百勝できよう²⁹

この吉祥をほめたたえる祝詞は「ナーダム」というこの伝統娯楽活動とともに、今に至るまでずっと伝承されている。

《原題》「“那达幕”大会的由来」116-118 頁。バヤンダライ口述及び関係資料整理

謝辞

原著は翻訳者が 2001 年ウーシン旗でフィールド調査中に入手したものである。寄贈者に心よりお礼を申し上げる。翻訳は中国語 V で進めた。受講生および院生のスルナさんにも感謝の意を記したい。

²⁹ モンゴルの弓は、竹や樹皮と、動物の筋、ウシの角などを組み合わせてつくられている。矢は、軽くするためにヤナギの木でつくり、矢じりには大鹿の角、矢羽根にはハゲワシの羽が用いられる（二木 1987 : 91）。

引用文献

- ウター、ハンス＝イェルク、加藤耕義訳、小沢俊夫日本語版監修（2016）『国際昔話型カタログ：アンティ・アールネとステイス・トムソンのシステムに基づく分類と文献目録』小澤昔ばなし研究所。
- 児玉香菜子訳（2016）「オルドス民話収集（1）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』18:121-140.
- （2018）「オルドス民話収集（2）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』20:323-339.
- （2019）「オルドス民話収集（3）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』21:181-199.
- （2020）「オルドス民話収集（4）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』22:389-408.
- （2021）「オルドス民話収集（5）銭世英著、1999年、フフホト」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』23:89-111.
- サランゲレル、児玉香菜子訳（2017）「モンゴルの祭祀儀礼における馬乳酒」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』19: 19-27.
- 中村淳・松川節（1993）「新発見の蒙漢合璧少林寺聖旨碑」『内陸アジア言語の研究』8:1-92.
- 二木博史（1987）「弓競技について」『騎馬民族—スポーツの祭典 格闘技通信 11 月号増刊』ベースボール・マガジン社、91.
- 松川節（1998）『図説モンゴル歴史紀行』河出書房新社.
- モスタールト、アントワヌ、村上正二訳 1985「オルドス・モンゴルに関する民俗資料」『モンゴル研究』16:54-86（Mostaert, A. (1956) MATÉRIAUX ETHNOGRAPHIQUES RELATIFS AUX MONGOLS ORDOS." *Central Asiatic Journal* 2-4: 241-294）.
- 銭世英（1999）『鄂尔多斯民间采风』内蒙古人民出版社.

（こだま かなこ・千葉大学人文科学研究院）

Collections of Ordos folktales (6): Qian Shiyong, 1999, Huhhot

KODAMA Kanako

This text is a partial translation of "Ordos Folklore Collections" (published by Inner Mongolia People's Press, 1999). The original title is "鄂尔多斯民间采风 (Eerduosi minjian caifeng)" in Chinese, and the text is edited by Jagas (Mongolian name) who went by the pseudonym of Qian Shiyong. The original manuscript was written in Chinese. This book contains eighty-six folktales collected in the Ordos district of the Inner Mongolia Autonomous Region, China, and arranged by editor. The prominent place of the collection is probably the author's hometown of Üüshin (Wushen) Banner in the Ordos district. The folktales fall into one of three categories: folktales about animals and plants (28), folktales about people (34), and myths (24). I translated seven of the folktales about people.

The first tale, "Good-son and firewood gathering hand," is about a tragic woman and her son, whom she had raised with great difficulty, who tried to abandon her due to the influence of his ill-natured wife. In the end, the son and his wife are rewarded for their cruel act. A yellow dog with magical powers helps the woman. The yellow dog also appears in "The son-in-law," which has already been translated into Japanese, and once again, we are reminded of its important role. The second tale, "Three sesame seeds bring back hardship," is about a servant who has been serving stingy rich men for many years and does not get paid enough, so he takes revenge by visiting many of the rich men's inns and going through a series of exchanges from three sesame seeds up to a mule and beyond, similar to the Japanese tale "Warashirobe Choja." The third tale, "She San and Xie Si (this one and that one)," is the same as the second tale. The main character, Mr. Xie, who worked for the rich man Mr. She, asks to be paid more but receives only 5 kilograms of sesame oil for his ten years of service. Mr. Xie donates the sesame oil to a temple and is promised a wealthy future. On the other hand, Mr. She donates a lot of silver but is told that he will become an ugly donkey in his next life. He is then admonished by his daughter to reflect on his past misdeeds in order to avoid this cruel reincarnation. The first, second, and third folktales translated here are primarily categorized as retribution. At the same time, the second and third episodes show a socialist point of view that criticizes the exploiting class. The fourth tale is a quick-wit story about a King searching for a prospective witty and wise daughter-in-law. The fifth tale is an ironic short story of a father who prized two of his supposedly cultured son-in-laws but not the third son-in-law who was a farmer. The sixth tale pokes fun at a

foolish young man who wants to be a hero in the People's Communes. The seventh is about the origin and introduction of the Mongolian traditional festival.

The narrators of the first and fourth tales are the editor's aunt and that of the second is the editor's father. Both of these narrators are Mongols. On the other hand, the narrator of the third tale is He Yuzhu, that of the fifth is Yang San, and that of the sixth is Wang Shengli. The characters' names and the content of the folktales suggest that these three tales are of Chinese origin and that the narrators are all Chinese.